小段遺跡発掘調査概報

1993

塩尻市教育委員会

序

小段遺跡は小曽部川右岸の河岸段丘上にあり、縄文時代の遺物が多く採集されることから古くから知られていました。このたび中部電力株式会社の鉄塔仮設工事に伴い、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から市教育委員会に緊急発掘調査が委託されたものであります。

発掘調査は初冬の11月から行われ、雪の降る中の調査もありましたが、地元の方々の深い御理解にも恵まれ、おかげを持ちまして、数多くの貴重な成果をおさめることができました。

終わりにあたり、本調査が無事完了できましたことは、御協力をいただいた中部電力株式会社長野支店をはじめ、地権者、地元の方々の深い御理解と御援助によるものであり、ここに心から敬意と感謝を捧げる次第であります。

また、発掘に携わっていただいたみなさんには、厳寒の中を御苦労いただき重ねて謝意を表するものであります。

平成5年3月20日

塩尻市教育委員会
教育長　平出友伯

例　言

1．本書は、塩尻市教育委員会が中部電力株式会社から委託を受けたＦＣ分岐線２cct化鉄塔仮設工事に伴う小段遺跡発掘調査概報である。

2．現場での発掘調査は平成４年11月27日から12月24日まで実施し、遺物および記録類の整理作業から報告書作成は平出遺跡考古博物館において平成４年12月から平成５年２月まで行った。

3．発掘調査団は次のとおりである。

団　　長　：　平出友伯（塩尻市教育長）

調 査 員　：　小林康男、小口達志

調査補助員　：　布施光敏、青野友哉、平久保直希、藤森英二

4．本書の執筆・編集は小口が行った。

5．本調査の出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目　次

序

例言

Ⅰ．調査経過 …… 2

Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 3

Ⅲ．調査概要 …… 4

Ⅳ．遺構と遺物 …… 5

　１．Ａ地区 …… 5

　２．Ｂ地区 …… 13

　３．Ｃ地区 …… 15

Ⅴ．まとめ …… 21

Ⅰ．調査経過

調査に至る経過

平成４年４月22日　中部電力株式会社からFC分岐線２cct化鉄塔仮設工事に伴う小段遺跡発掘調査の照会。

８月５日　FC分岐線２cct化鉄塔仮設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託について（依頼）。

11月６日　埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について中部電力株式会社と委託契約締結。

11月27日～12月24日　現場における発掘調査を実施。

12月28日　発掘調査終了届の提出。

12月28日　埋蔵文化財拾得届の提出。

平成５年　月　日　埋蔵物の文化財認定について通知。

発掘調査の経過

平成４年。11月27日 (金) 晴 テント設営。B地区掘り下げ。

◦11月28日 (土)　晴のち曇　B地区掘り下げ。29日 (日)・30日 (月) 定休日。

◦12月１日 (火)　曇のち雨　B地区掘り下げ。B－１・３地区完掘、遺構なし。

◦12月２日 (水)　曇　A•B地区掘り下げ。　◦12月３日 (木)　晴　A•B地区掘り下げ。

◦12月４日 (金)　晴　A•B•C地区掘り下げ。　◦12月５日 (土)　晴　A•C地区掘り下げ。

◦12月７日 (月)　晴　A•C地区掘り下げ。　◦12月８日 (火)　雨　雨天中止。

◦12月９日 (水)　晴　A地区掘り下げ。１号住居跡検出。C地区掘り下げ。１号集石遺構検出。

◦12月10日 (木)　晴　A•C地区掘り下げ。４号住居跡検出。

◦12月11日 (金)　雪　A•C地区掘り下げ。平面図作成。１号住居跡で配石をもつ立石検出。

◦12月12日 (土)　曇のち雪　A•C地区掘り下げ。

◦12月13日 (日)　雪のち雨　セクション図化。

◦12月14日 (月)　晴のち雪　A•C地区掘り下げ。２・３・５号住検出、掘り下げ、平面図化。

◦12月15日 (火)　晴　A地区掘り下げ。６号住検出。５号住遺物写真撮影。１号集石平面図化。

◦12月16日 (水)　晴　１～４号住掘り下げ。１号集石セクション図化。13号小竪穴検出。

◦12月17日 (木)　晴のち雪　１～５号住、B地区小竪穴掘り下げ。

◦12月18日 (金)　晴　積雪にて中止。

◦12月19日 (土)　晴　１～５号住掘り下げ。15号小竪穴検出、注口土器出土。写真、平面図化。

◦12月21日 (月)　晴　１～３・５号住完掘、写真撮影。４・６号住掘り下げ。

◦12月22日 (火)　晴　１～６号住平面図化。

◦12月23日 (水)　雪　A地区セクション図化。

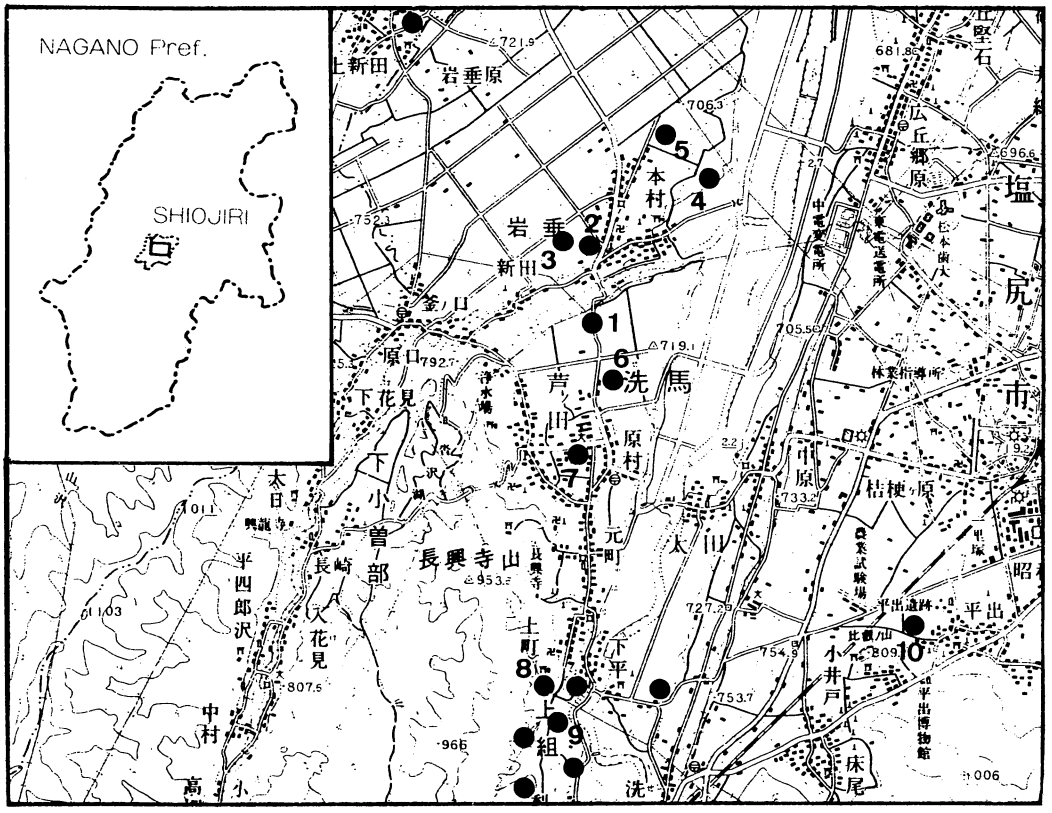
◦12月24日 (木)　曇のち雪　B地区小竪穴掘り下げ、平面図化。本日をもって作業を終了する。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

小段遺跡は塩尻市大字洗馬芦ノ田に所在し、奈良井川と小曽部川によって形成された河岸段丘上に位置する。木曽谷から松本平へ流れ出した奈良井川は土砂を押し出し、両岸に河岸段丘を形成する。左岸の高位段丘にあたる芦ノ田面は、妙義山系が背後に迫っているため僅かな幅で川沿いに延びているが、小段遺跡から北は小曽部川を挟み広大な畑地が続いている。北流する奈良井川に向かって小曽部川はほぼ直角に合流しており、遺跡周辺の地形は奈良井川に向かって緩やかに傾斜している。

小段遺跡は小曽部川右岸沿いの妙義山系から奈良井川に広がる畑地のほぼ中央に東西に展開しており、この河川の流域に立地する多くの遺跡のうちの一つである。

小曽部川上流では三ヶ組、大日、山鳥場の各遺跡が知られており、縄文時代中期・後期土器、打製石斧、磨石、凹石などが出土している。中流の対岸では岩垂、山ノ神、権現堂、岩垂原の各遺跡が知られ、縄文前期の竪穴住居跡、縄文前期・中期土器、土偶、打製石斧、磨製石斧、石皿、石鏃、石匙、石棒、玦状耳飾りなどが出土している。



第１図　小段遺跡位置図

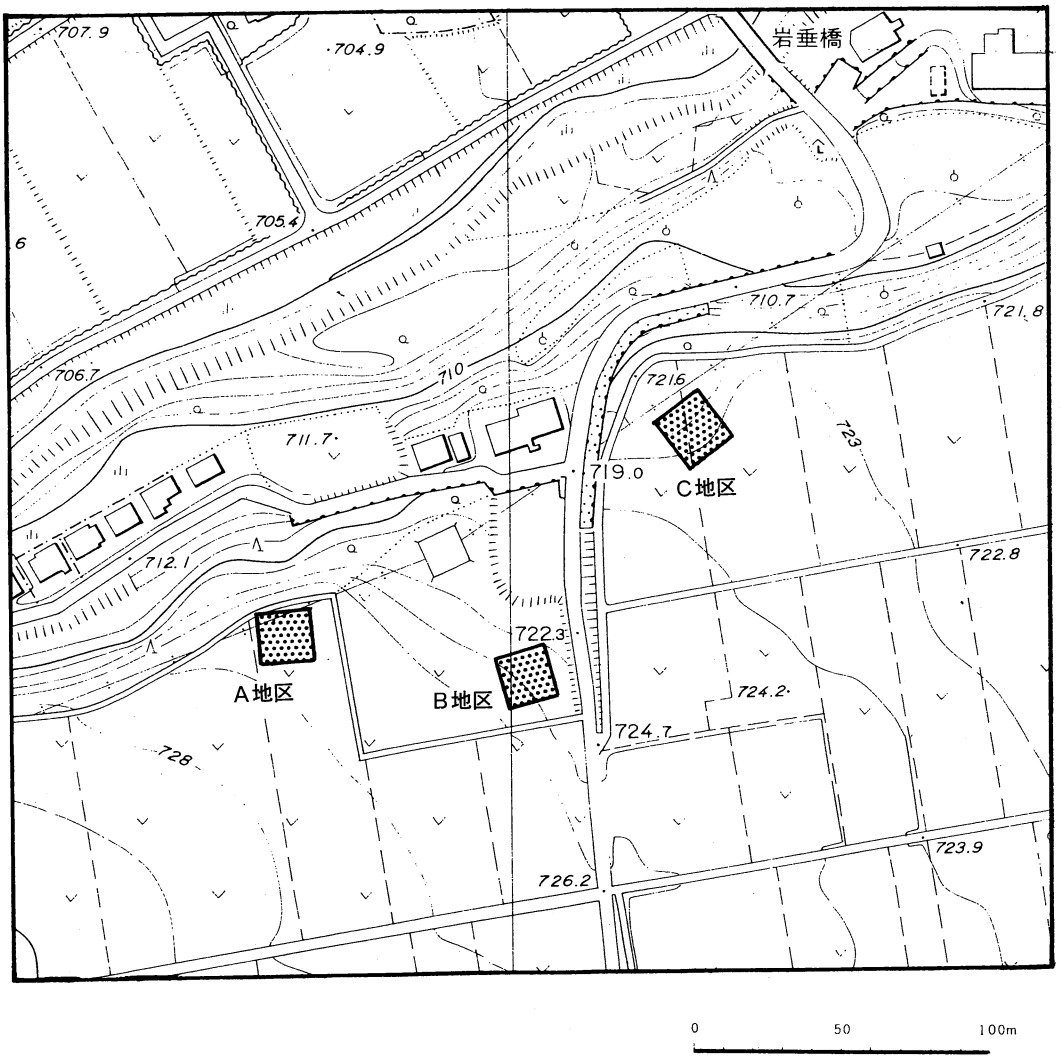
Ⅲ. 調査概要

小段遺跡は、昭和53年に発掘調査が行われ、調査面積は少なかったものの縄文時代中期住居跡10軒、小竪穴７基、集石６基、ピット群２を検出し、中期の大規模集落として認識されていた。

調査区は、鉄塔仮設部分の３地区でそれぞれ５×５ｍの脚部４か所を表土から人力で掘り下げた。調査面積は300㎡である。

検出遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡15軒、同後期１軒、小竪穴17基、集石１基で１号住居跡は石囲炉の奥壁に接して配石をもつ立石があり注目される。また、縄文後期の土壙墓と配石墓が検出され、13号小竪穴は甕被葬土壙墓で、15号小竪穴からは注口土器が出土した。

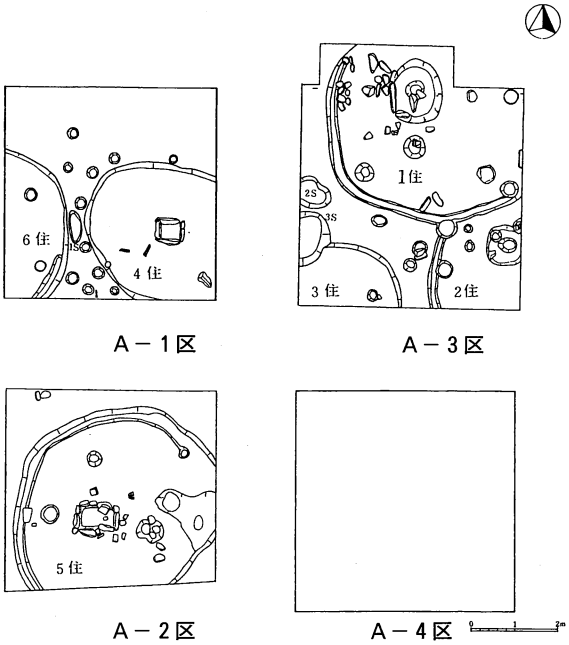
出土遺物は、縄文時代早期（条痕文土器）、中期中葉・後葉土器、後期（堀之内式土器・加曽利Ｂ式土器）、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、石鏃、石匙、石錐、石棒、石剣がある。



第２図　　調査区全体図

Ⅳ. 遺構と遺物

1．A地区



第3図　A地区遺構分布図

今回の調査地点では一番西に位置し、小曽部川によって形成された河岸段丘のへりにあたる。北側は比高差約15mの崖となっている。層序は、20cmほどの耕作土の下は包含層である暗褐色土がきれいに残り、以下、ローム層が約80cm、礫混じりローム層、砂礫層と続く。

A－4区を除いて遺構が検出され、住居跡は縄文時代中期後葉曽利式併行期5軒、後期前葉堀之内式併行期1軒の計6軒で、小竪穴は3基である。中期は配石をもつ立石のある住居跡が注目される。他の住居跡もほぼ同時期で密集していることから、大規模な集落が予想される。後期の住居跡覆土中からは多量の礫、土器が出土し、堀之内式土器の良好な資料となった。

▶1号住居跡

A－3地区に位置する。耕作土下の炭を含む褐色土の落ち込みを確認し、ローム漸移層で検出する。床面まで掘り下げたところ、北端で配石をもつ立石を検出したため、北側に1m拡張し配石と炉の全貌をつかむことができた。

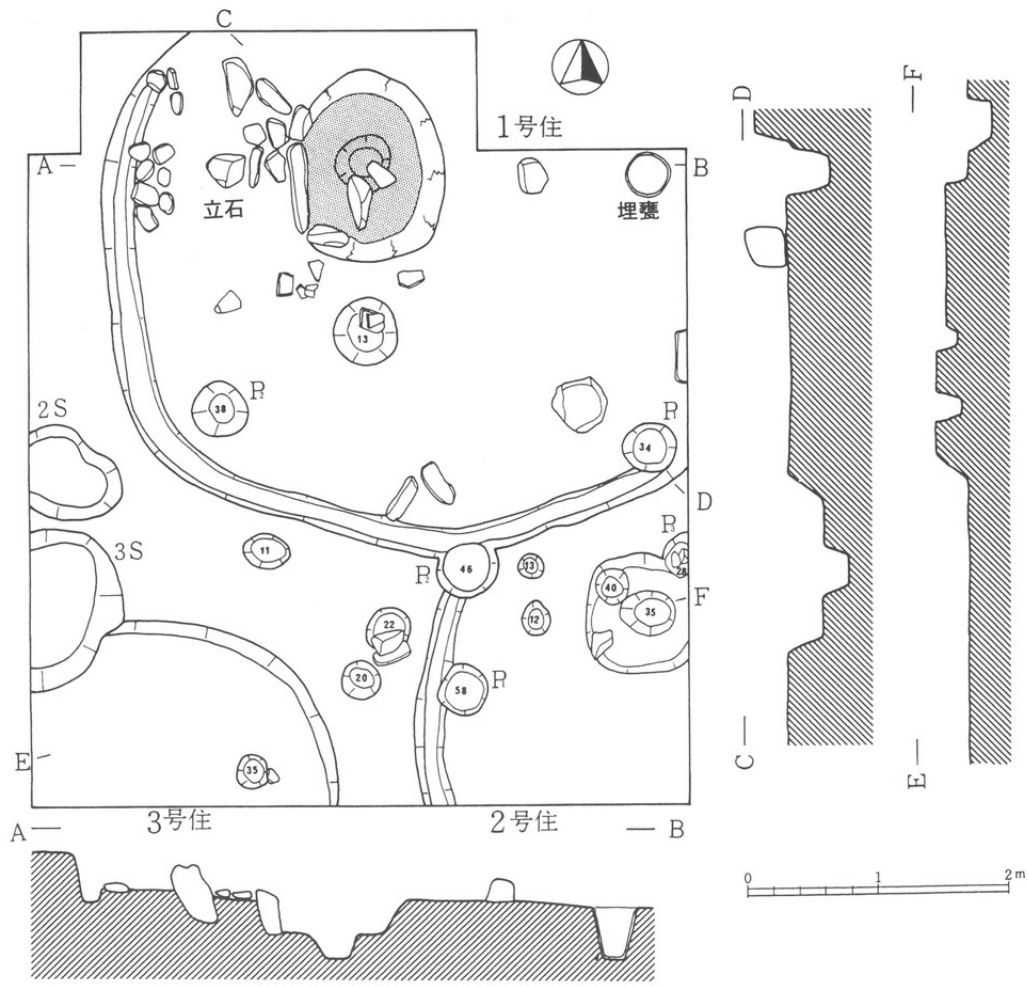
プランは直径約5mの円形と推定される。床面はほぼ平坦で、埋甕と炉の間が特に堅く、東側も比較的堅いが、立石の周囲は軟らかい。壁は垂直に立ち上がり、壁高は南側で30cm、西側で40cmを測る。壁下には周溝が設けられる。

炉は中央やや奥寄りに設けられ、炉石は奥と左に残る。掘り込みは30cmで更に20cmの円形の掘り込みがある。埋土からは直径1cm前後の骨片がやや多く出土した。

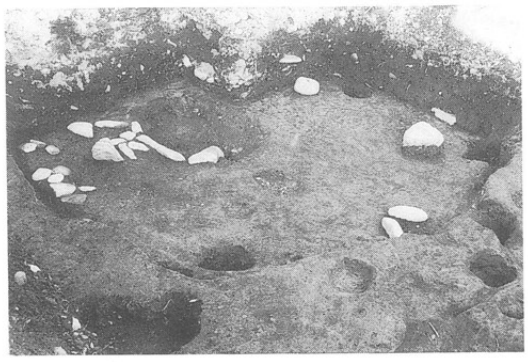
ピットは2基検出し、主柱穴と考えられ、本址は4本柱と推定される。

炉の奥に設けられた立石は、床面から約20cm頭を出し、床下約25cmに斜めに埋め込んである。周囲の配石は偏平なものを用いて、床にわずかに埋めてある。炉を挟んだ一直線上には埋甕が設けられ、胴下半部を欠いた唐草文土器の深鉢1が出土した。

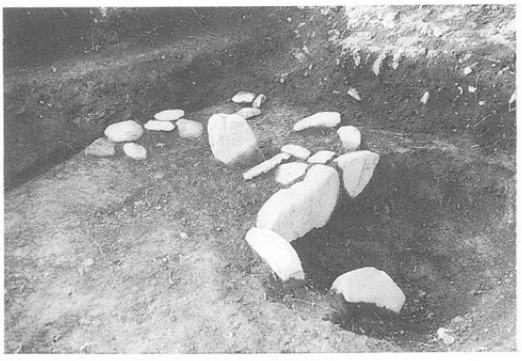
遺物は床面から10cm程上の覆土中から比較的多く出土しているが、4は床面につぶれた状態で出土した。石器は打製石斧2点、磨石1点、石鏃1点、石棒1点、使用痕のある剥片2点、黒曜



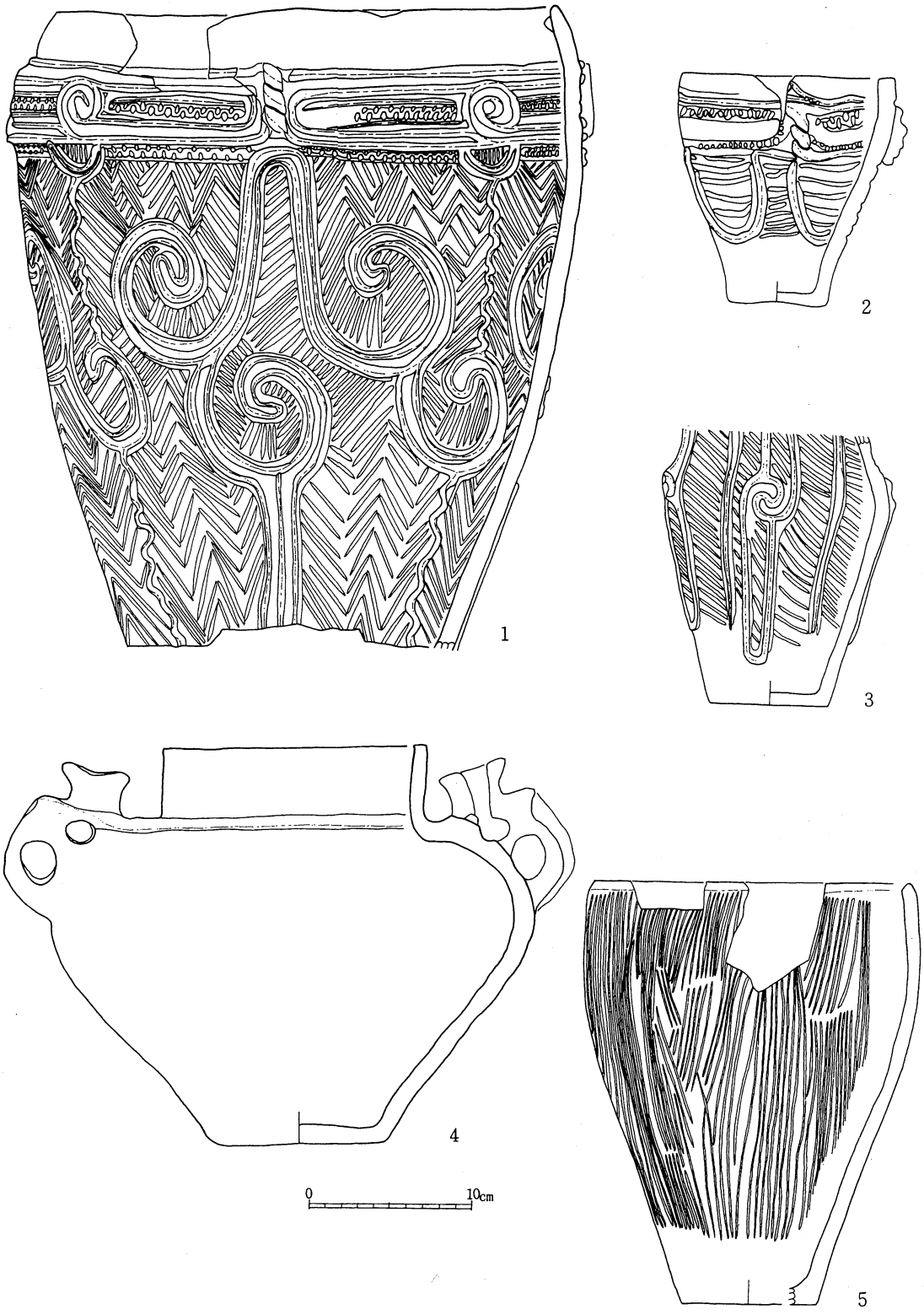
第4図　　A－3区　1・2・3号住居跡、2・3号小竪穴実測図



1号住居跡



1号住居跡内立石



第5図　　1号住居跡出土土器

2号住居跡

石の石核2点が出土している。

時期は中期後葉、曽利Ⅱ式期に属する。

▶ 2号住居跡

1号住居跡の南に位置するが、全体の4分の1弱を検出したのみで北側の溝周は1号住居跡に切られており、全容は不明である。

暗褐色土を掘り下げ、ローム漸移層において土器片の出土がやや多くなり、落ち込みを確認したところで検出した。覆土は、炭化物や遺物を含む褐色土層のみである。

床面は平坦で、非常に硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約15cmである。壁下には周溝が設けられる。炉は検出されていない。ピットは掘りこみの深いP1が、主柱穴と考えられ、P2は本址に属するかは不明である。P3の底には、石が詰め込まれていた。

遺物は少ない。中期後葉、曽利Ⅱ式期に属する。

▶ 3号住居跡

1号住居跡の南に位置するが、わずかに検出されたのみで全容は不明である。一部、3号小竪穴に切られる。掘りこみ面をなかなか確認することができず暗褐色土を掘り下げ、ローム層に近くなったところで検出した。覆土は、炭化物や遺物を含む褐色土層のみである。

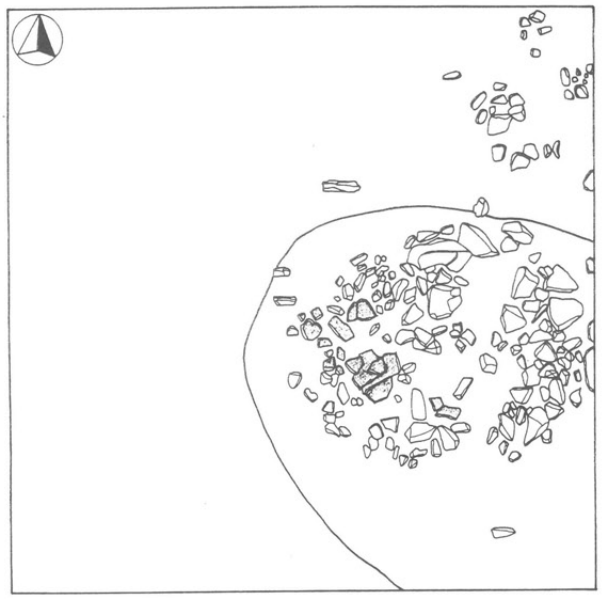
床面は平坦で硬く締まっている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は25～28cmである。周溝は存在しない。深さ35cmのピットが1基検出された。

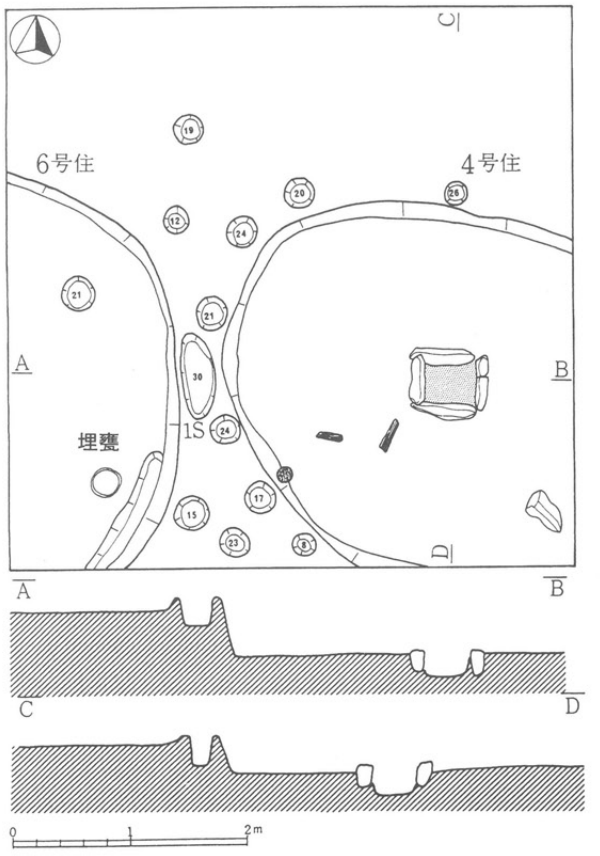
遺物は少なくピットの脇、床面よりわずか上の覆土から深鉢が出土し、石器は打製石斧が1点、使用痕のある剥片1点がある。中期後葉、曽利Ⅱ式期に属する。

▶ 4号住居跡

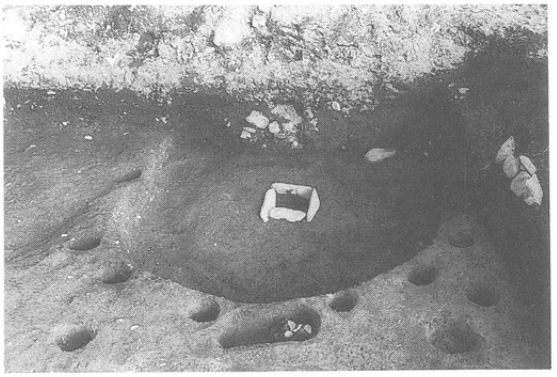
A－1地区に位置する。耕作土を取り去ったところ、炭化材や炭化物をやや多く含む黒色土が現れた。攪乱の可能性も考えながら掘り下げたところ礫と土器が多量に出土し、暗褐色土層中に落ち込みを確認し、遺構と判断するに至った。覆土は、遺物と礫（直径5～40cm）の多い暗褐色土層及び黒色土層とその下の明褐色土層の3層に分かれる。当初、落ち込みが遺物と礫の範囲内で収まると考え、小竪穴として覆土を掘り下げたところ、掘り込みが拡がり、石囲炉を検出したことによって住居跡と確認した。

プランは直径は約3m強の円形と推定される。

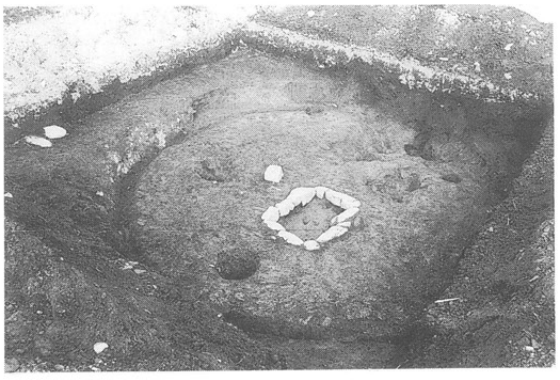




4号住居跡遺物出土状況

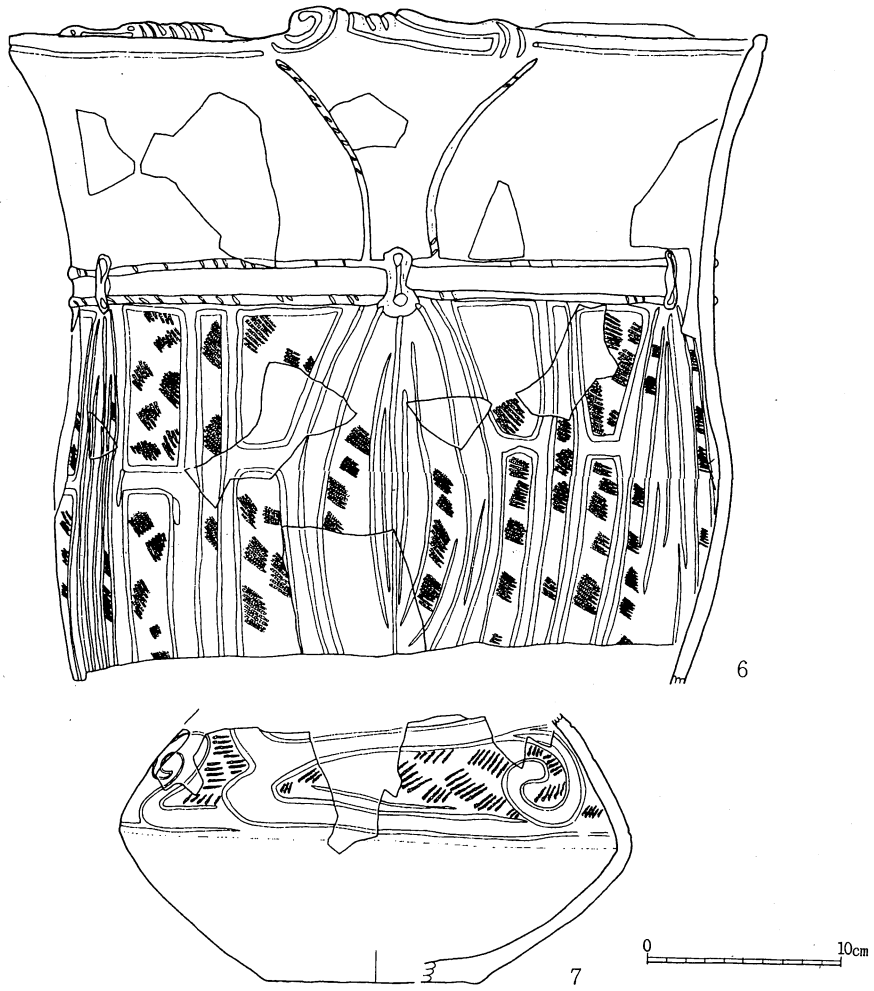


4号住居跡



5号住居跡

第7図　A－1区4・6号住居跡、1号小竪穴実測図



第8図　　4号住居跡出土土器

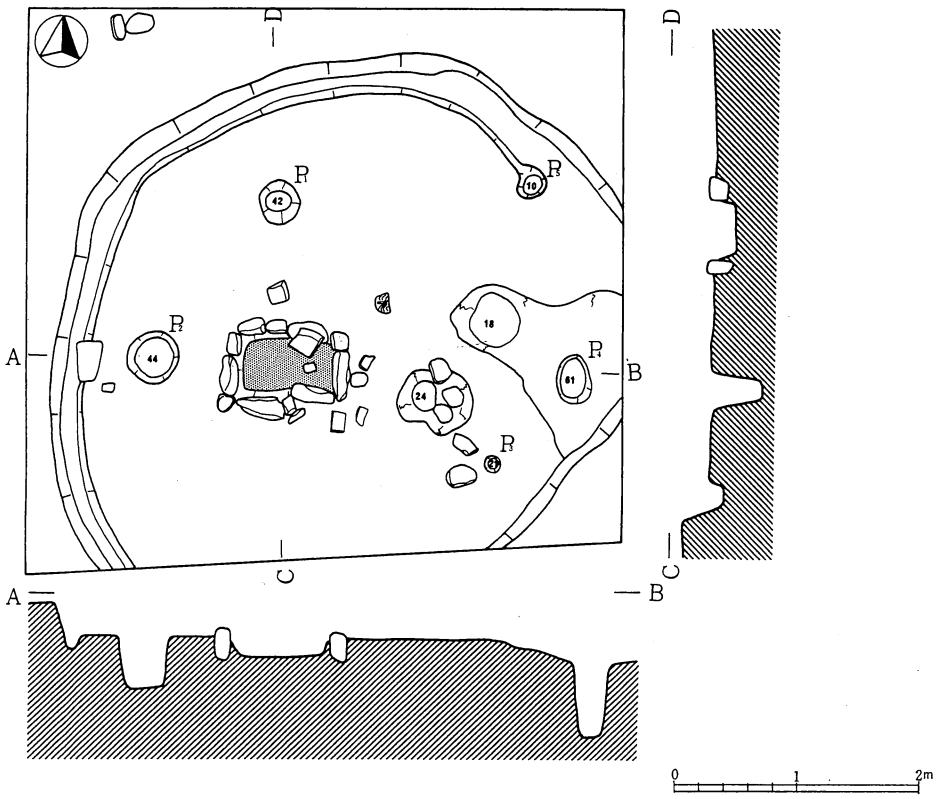
床面は平坦で全域にわたって硬く締まっている。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西側で60cm、南側で56cmと深い。北側は浅くなっているが検出時に掘り下げすぎたことによる。

炉は中央に設けられ、炉石はしっかりと埋め込まれている。

ピットは掘りこみの内部からは一切検出することができず、壁上に周るピットが柱穴と考えられる。

遺物は覆土上層中から堀之内式土器が多量に出土している。6は口径39cmの大形の深鉢で、口縁部に3単位の突起を持ち、胴部は6単位の縦位の沈線で構成される。この他に注口土器なども出土している。石器は凹石2点、石鏃2点が出土した。遺物が出土した層位は覆土上層に限られ、下位の明褐色土層からは全く出土しなかった。



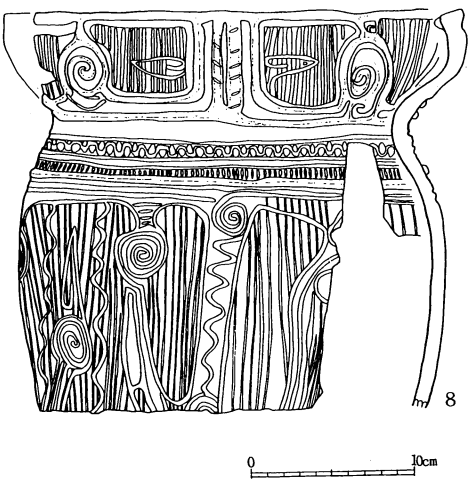
第９図　　Ａ－２区５号住居跡実測図

▶ ５号住居跡

Ａ－２地区に位置する。耕作土下の暗褐色土層でローム粒を含んだ褐色土の落ち込みを検出し、住居跡であることが確認された。

プランは直径約５ｍの円形と推定されるが、東側の掘り込みがはっきりしない。床面は炉からＰ４にかけての場所を除き平坦で硬く締まる。

壁は北側で24㎝、西側で26㎝、東側で10㎝を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には周溝が設けられるが、東側では検出できなかった。

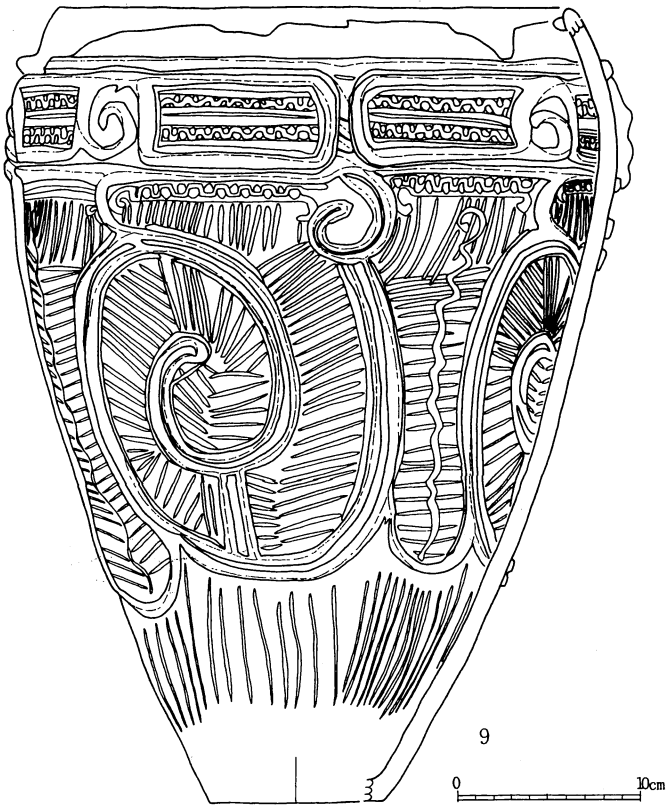


５号住居跡出土土器

炉は中央やや奥寄りに設けられ、炉石は埋め込まれきれいに残っている。炉の掘り込みの深さは約20㎝で長方形を呈し、底面には焼土が広がる。

ピットは５基検出し、Ｐ１とＰ２が主柱穴と考えられる。

遺物は覆土中からの出土が大半で破片が多い。中期後葉、曽利Ⅱ式期に属する。



第11図　　6号住居跡出土埋甕

▶ 6号住居跡

A地区、4号住居跡の西に位置する。耕作土下の暗褐色土層で炭化粒を含んだ暗褐色土の落ち込みを検出し、住居跡であることが確認された。

プランは円形を呈すると考えられるが、4分の1程度の検出で全容は不明。

床面は平坦で、硬く締まる。

壁は北側で15cm、東側で19cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下に一部周溝が設けられる。

ピットは、主柱穴と考えられる1基を検出した。

東側周溝脇に埋甕が設けられ、底部を欠いた唐草文土器の深鉢が出土した。遺物は覆土中からわずかに土器片が出土したのみである。中期後葉、曽利Ⅱ式期に属する。

▶小竪穴

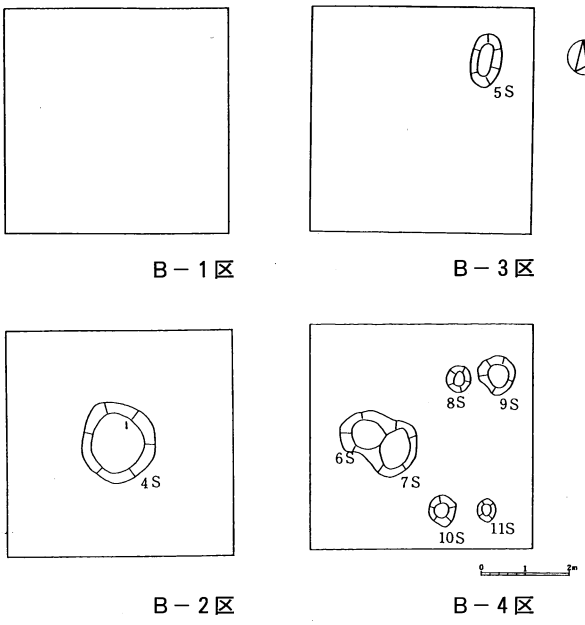
総数、3基検出した。

1号小竪穴は、A－1地区の4号住居跡と6号住居跡の間に位置する。径70cm×30cmの細長い楕円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ30cmを測る。壁面と底面はともに軟らかい。埋土は炭化粒を含んだ褐色土一層のみで、平出三A土器の胴部破片が出土した。

2号小竪穴は、A－3地区の1号住居跡と3号住居跡の間に位置する。一部、未検出であるが径90cm×70cmのややくびれた楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ40cmを測る。底面は平坦で、壁面とともに硬く叩き締められている。遺物は中期後葉の土器の破片がわずかに出土している。

3号小竪穴は、2号小竪穴に近接し、3号住居跡を切っている。半分を検出したにとどまるが、径1.1mの円形を呈すると推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ60cmと深く掘り込まれている。埋土は2層に分かれ、堆積状況から自然埋没と考えられる。底面は平坦で、壁面とともに硬く叩き締められている。遺物は中期後葉の土器の破片がわずかに出土している。

2．B地区



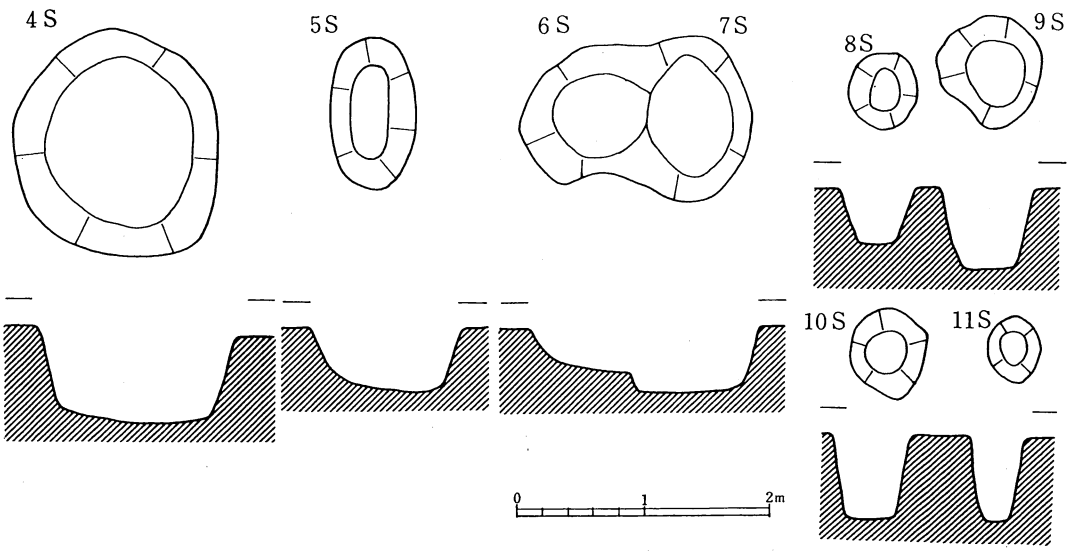
第12図　　B地区遺構分布図

小曽部川によって形成された河岸段丘の段丘崖から50m程はいった平坦な地域にある。層序は20～30cmの耕作土の下は10cmに満たないわずかな包含層である暗褐色土層が残存し、以下、砂れき混じりの暗褐色土層、ローム層、砂礫層と続く。A地区で見られたローム層は堆積していない。B－1区を除いて小竪穴が8基検出された。出土土器から中期、後期の所産と考えられる。

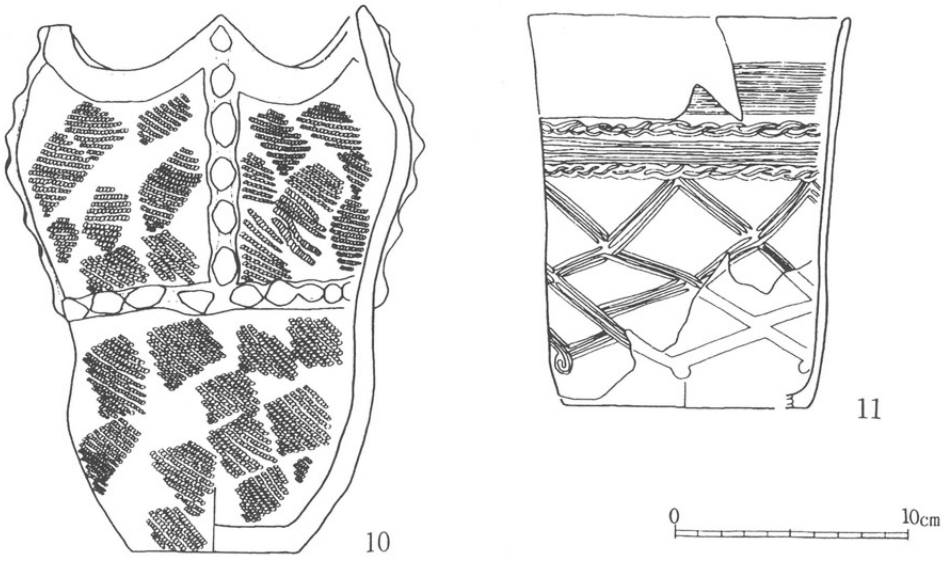
遺物は後期の土器を主体として多く出土しているが、包含層が浅いため耕作が及んで原位置をとどめていないものがほとんどである。

▶小竪穴

4号小竪穴はB－2区の中央に位置する。砂礫混じりの暗褐色土層で落ち込みを検出したが埋土との判別が難しく掘り下げるのに苦労した。径1.8m×1.6mの円形プランで、深さ70cmを測る。埋土は2層からなり、その堆積状況から自然埋没と考えられる。中期中葉から後葉にかけての土器片が多く出土しており、投げ捨てられたものと思われる。石器は打製石斧2点、石匙1点、



第13図　　B地区4～11号小竪穴実測図



第14図　　B－4区出土土器

石錐1点、使用痕のある剥片1点が出土している。

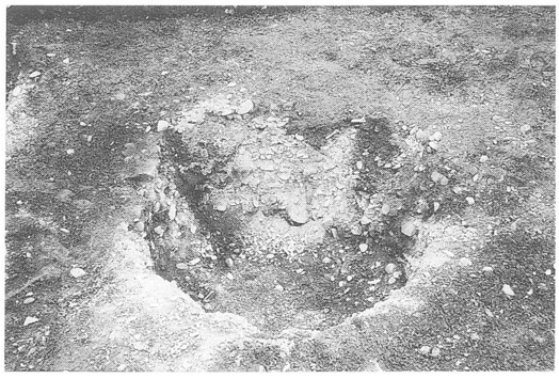
5号小竪穴はB－3地区に位置する。当初、遺構は無いと判断していたが、乾燥してこの部分の色の違いから確認するに至った。径1.2m×0.7mの楕円形を呈し、深さ50cm。埋土は砂礫混じりの暗褐色土にわずかに炭粒を含む。堀之内式土器がわずかに出土している。

6～11号小竪穴はB－4地区に位置する。5号小竪穴同様、砂れき混じりの暗褐色土層で検出したが埋土との識別に苦労した。

6、7号小竪穴はそれぞれ、径1.2m×1.0m、深さ35cm、径1.3m×1.1m、深さ45cmの楕円形を呈する。埋土は砂礫混じりの暗褐色土にわずかに炭粒を含む。中期中葉から後葉にかけての土器片が比較的多く出土しており、4号小竪穴同様、投げ捨てたものと考えられる。

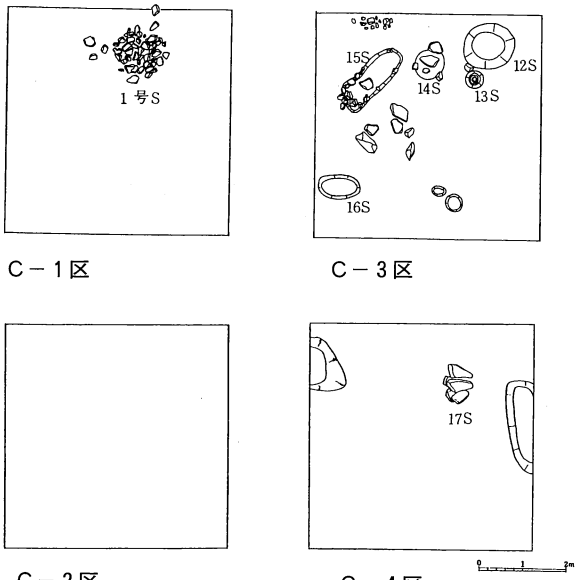
8号、9号、10号、11号小竪穴はそれぞれ、径60cm、80cm、60cm、40cmの円形を呈し、深さは45cm、60cm、65cm、60cmである。埋土から堀之内式がわずかに出土している。10、11号小竪穴を中心とした耕作土と包含層から堀之内式土器と加曽利B式土器がまとまって出土しており、関連が予想される。

また、B－4区南西隅の包含層からは中期中葉土器が単独で出土している。



4号小竪穴

3．C地区



第15図　C地区遺構分布図

南から続いた平坦な地形からやや窪んで低くなっている部分にあたる。層序は40～50cmの耕作土、20cmの黒色土層、30～40cmの包含層である暗褐色土層、ローム層と続くが、C－3地区のレベルでは一番低い北側ではローム層がなく砂礫層である。C地区は包含層までが深く、遺構検出に手間取ることとなった。遺構はC－3区を主として小竪穴8基、集石土坑1基を検出した。小竪穴については、土壙墓と配石墓が含まれる。

▶小竪穴

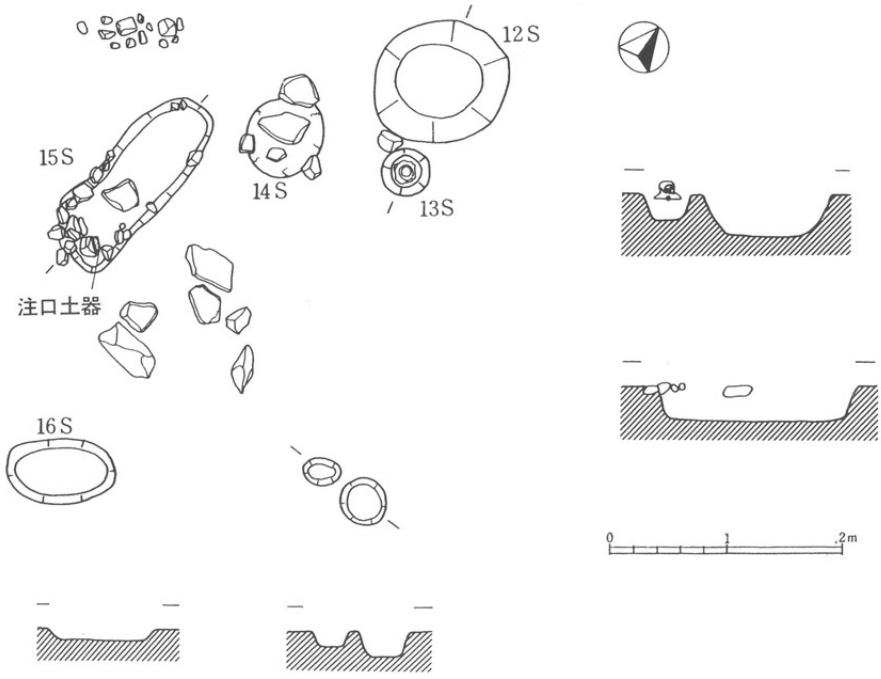
12号小竪穴から16号小竪穴はC－3区に位置する。

12号小竪穴は包含層下位で検出したが掘り込み面は更に上の可能性がある。径1.2m×1.0mの楕円形を呈す。深さは40cmを測り砂礫層に掘り込まれ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土層で炭粒をわずかに含み、遺物は堀之内式土器が出土している。

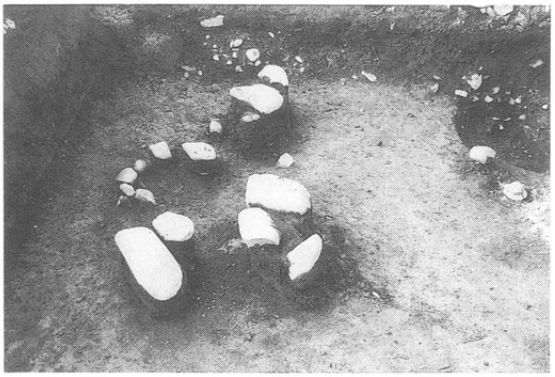
13号小竪穴は、包含層下位で伏せた状態の堀之内式土器を検出し掘り下げたところ、砂礫層に暗褐色土の落ち込みを確認し検出することになった。掘り込み面は包含層中にあったと考えられる。径40cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。出土土器は完形で口縁部に3単位の突起を持ち、胴部には3単位の渦巻文が施され縄文が充填される。高さ8.5cm、口径15.8cm。時期は後期前葉、堀之内Ⅱ式期に比定される。

14号小竪穴は、包含層中で検出された4個の礫を取り除き掘り下げたところ、ローム層に落ち込みを確認し検出することとなった。掘り込みはわずかで、底面に相当すると考えられる。礫を検出したのは包含層上部であることから掘り込みの深さは約40cmと推定される。遺物は堀之内式土器がわずかに出土した。

また、14号小竪穴に近接して包含層から長大な礫を検出しているが、これらも包含層中に掘り込まれた小竪穴と考えられる。埋土と考えられる暗褐色土層から遺物は出土していない。

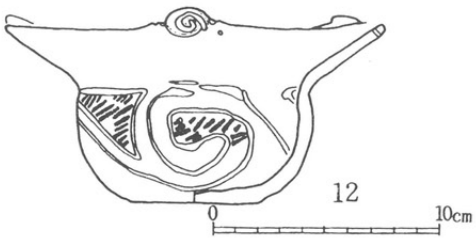


第16図　　C－3区 12～16号小竪穴実測図



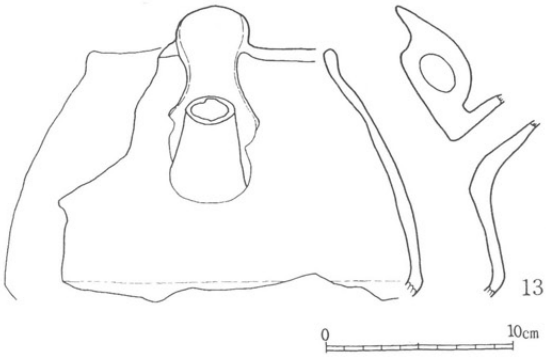
C－3区全体写真

13号小竪穴土器出土状況

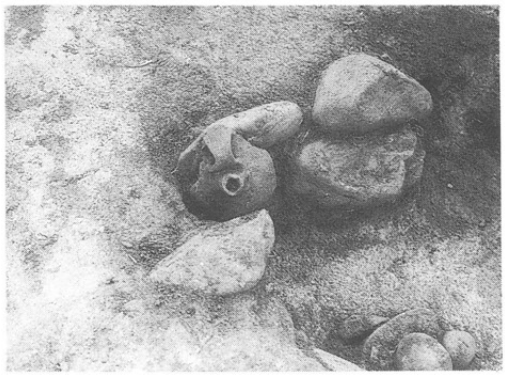


第17図　　13号小竪穴出土土器

15号小竪穴



第18図　15号小竪穴出土土器

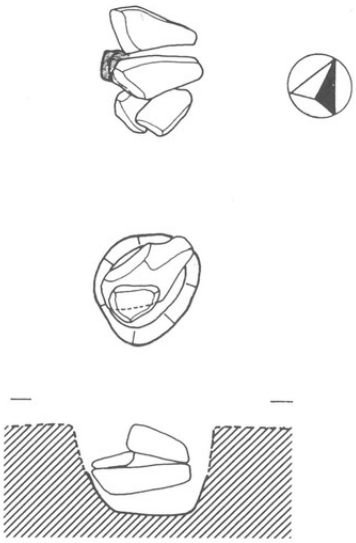


15号小竪穴注口土器出土状況

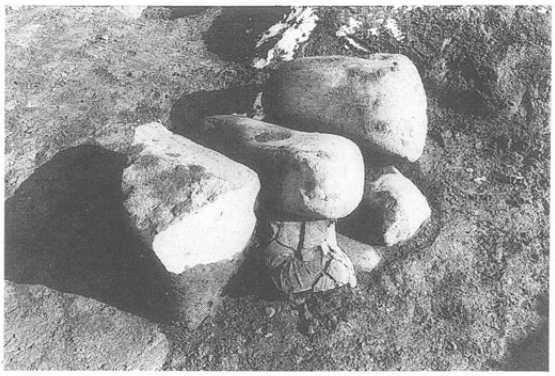
15号小竪穴は包含層下位で落ち込みを確認し、出土土器が多くなったことによって検出した。1.7m×0.7mの長方形を呈し、深さは南側で25cm、北側で20cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁面は比較的硬いが底面は軟らかい。南西側の壁上、壁面を中心に15cm前後の礫が埋設され、礫と礫の間に注口土器が置かれていた。注口土器は注口部分と把手の残る破片で、礫に立てかけられ、横向きの状態で出土した。こちら側を頭部として埋葬された配石墓と考えられる。埋土からは比較的多くの土器片が出土している。石器は砂岩製のスクレイパーが1点出土している。後期前葉、堀之内式期に比定される。

13号小竪穴とは規模、形態ともに異なるもののほぼ同時期の配石墓と考えられる。また、14号小竪穴などもはっきりした所属年代がわからないものの土壙墓と推察され、この地域一体が墓域であったと考えられる。

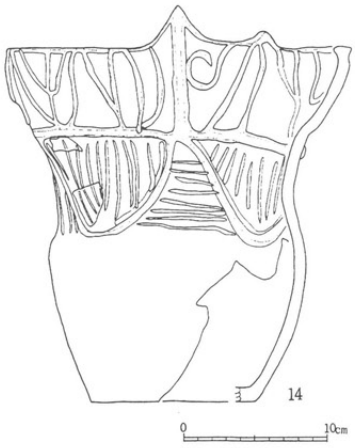
16号小竪穴はローム層で検出したが、暗褐色土層と埋土との識別が難しく掘り込み面は更に上にあったと思われる。90cm×50cmの楕円形を呈し、深さは10cmである。埋土は暗褐色土の単層で炭粒をわずかに含んでいる。出土遺物はない。



第19図
17号小竪穴実測図



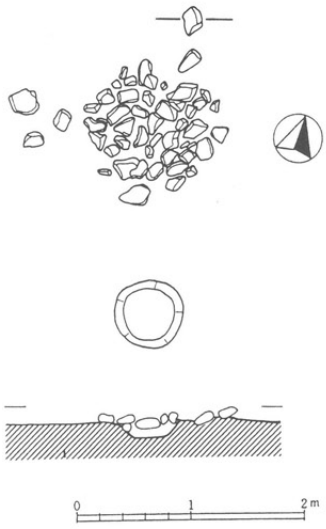
17号小竪穴



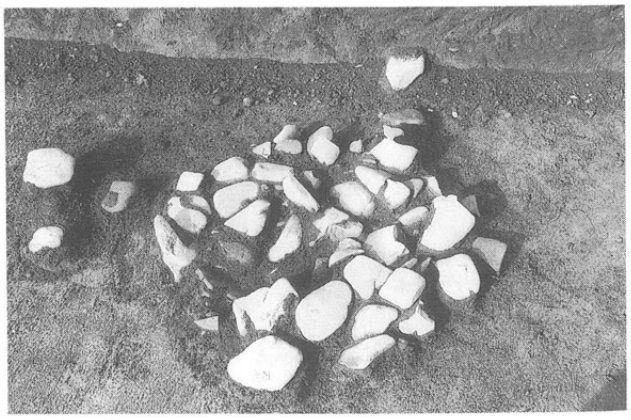
第20図　17号小竪穴出土土器

17号小竪穴完掘状況

17号小竪穴はＣ－４区に位置する。包含層の暗褐色土層において最大で長径60㎝の礫３個を検出し掘り下げたところ伏せた状態の土器が出土し、ローム層で落ち込みが確認された。掘り込み面は暗褐色土層で推定径１ｍの円形を呈し、推定深さ60㎝である。底面はやや硬く締まっている。５個の礫が内部に埋設されていたと考えられるが、最大で長径70㎝ある。埋土は暗褐色土で炭粒をわずかに含んでいる。出土土器は胴下半分から底部の一部を欠くものの残りはよく、時期は中期後葉Ⅰ期に比定される。



第21図　　1号集石実測図



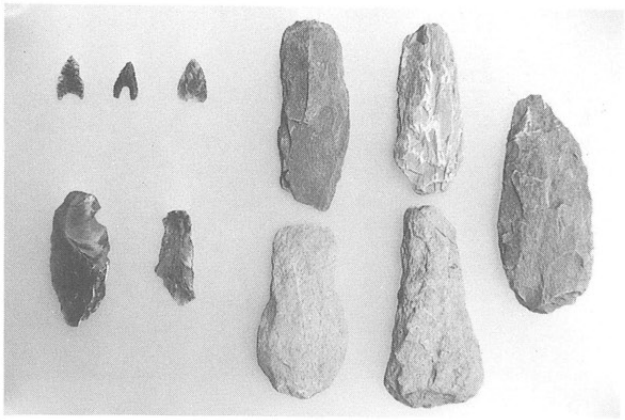
1号集石

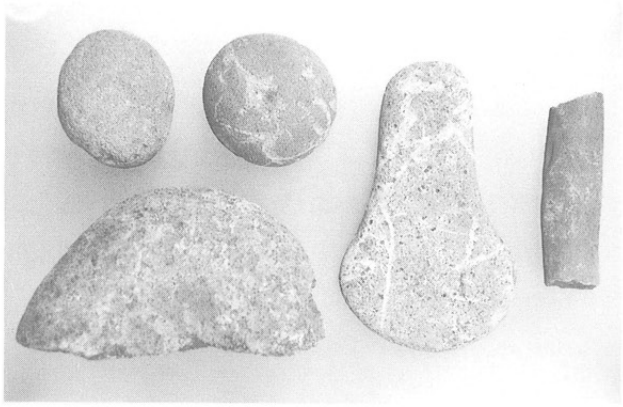
1号集石はC－2区に位置し、暗褐色土層下位において検出した。拳大から径20cm大の礫が径1.3mにほぼ円形に敷かれる。集石の下には径70cm、深さ16cmの土坑が掘り込まれているが、礫の範囲は平面的で底面までには及んでいない。やや赤化している礫も見受けられるが、顕著に火熱を受けた様子は認められない。礫と礫の間の土及び土坑の埋土は暗褐色土で炭粒を含んでいる。出土遺物は土器の小片があるが時期は決定できない。

13号小竪穴出土土器

15号小竪穴出土土器

17号小竪穴出土土器





石器は、遺構内出土のものはそれぞれ記したがここでは遺構外出土について述べる。

A地区では、A－1区から打製石斧1点、磨製石斧1点、凹石4点（わずかな打痕のものも含む）、使用痕のある剥片3点、A－2区から石鏃2点、横刃形石器1点、A－3区から打製石斧1点が出土している。

B地区では、B－2区から凹石3点、磨石3点、石剣1点、使用痕のある剥片2点、B－3区から打製石斧2点、B－4区から打製石斧1点が出土している。

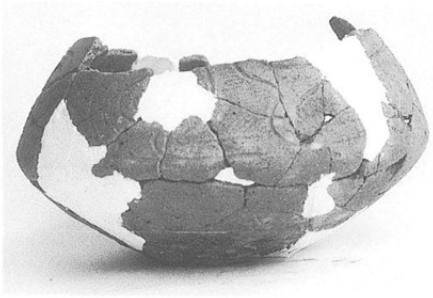
C地区では、C－1区から打製石斧2点、凹石1点、スクレイパー1点、使用痕のある剥片1点、C－2区から打製石斧3点、C－4区から打製石斧5点が出土している。

また、C地区の南の畑では天地返しがなされており、多量の土器とともに石器を採集することができた。その内訳は、打製石斧9点、磨製石斧2点、石皿2点、凹石30点、磨面のある凹石5点である。

1 | 2
3
4
5

1・2・3　1号住居跡出土土器

4・5　4号住居跡出土土器



V．まとめ

小段遺跡は、昭和53年に発掘が行われトレンチ調査で面積が少なかったものの、縄文時代中期の住居跡10軒、小竪穴７基、集石６基、ピット群２を検出し、遺跡内の畑地からも多量の遺物が採集されることから中期の大規模集落と目されていた。また、戦後土取りによって縄文時代後期の良好な出土品が報じられており、今回の調査箇所と近いことから該期の出土品も期待された。

今回、調査の対象となった３地区は、Ｂ地区が前回の調査地点とは県道上今井・洗馬停車場線をはさんだ反対側で住居跡の存在が予想されたもののＡ、Ｃ地区は遺物の散布も見られず遺跡の中心部からはずれていると考えていた。

Ａ地区では前述の予想を覆す結果となった。遺跡の西端部に位置していることから遺構の存在を考えていなかったが、６軒の住居跡を検出することとなった。包含層までが比較的深く、耕作が及んでいなかったこともあって地表に遺物が見られなかったと思われる。このうち５軒は縄文時代中期後葉Ⅱ期からⅢ期にかけてのもので密集している様子がわかる。この地域一帯に集落が営まれていたとすると遺跡の範囲は更に西方に拡がっていると考えられる。そして、１号住居跡からは配石を持つ立石が検出された。石囲炉から奥壁にかけて平らな石が敷かれ、中央部に長さ45cmの自然石が埋設されていた。埋甕から中期後葉Ⅱ期に比定されるが、神奈川県大地開戸遺跡（神奈川県立埋蔵文化財センター 1992）からは同様な遺構が検出されている。

Ｂ地区は、包含層までが浅くほとんどの箇所で耕作が地山である砂礫層にまで及んでいた。検出した遺構は縄文時代中期と後期の小竪穴８基である。後期の堀之内式土器と加曽利Ｂ式土器がまとまって出土したことは注目される。耕作の影響を受け原位置をとどめていないものの小竪穴に伴うものと考えられる。ここから土取りの行われた北側およびＣ地区にかけては縄文時代後期の遺構の拡がりが予想される。

Ｃ地区は小曽部川に向かってやや窪んでおり、遺跡付近の地形では一番低い部分にあたる。表面採集では遺物が全く得られなかったが、包含層までが深く耕作の影響を受けていなかったことによる。検出した遺構は土壙墓、配石墓を含め小竪穴８基と集石土坑１基で、配石墓からは副葬品と考えられる注口土器が出土した。破片であったことは惜しまれるが甕被土壙墓とともにこの付近一体が墓域であることを示す貴重な発見となった。また前回の調査で南側からは中期の住居跡が密集して検出されているが今回の調査では検出されなかった。地形的なことも考えられるが中期においても居住域とはなっていなかったことを示唆するものであろう。

調査は広範囲に拡がる遺跡の中でわずかな面積であったが、多くの遺構・遺物を検出することができた。付近一帯は開発が及んでいないこともあって、市内ではよく保存されている数少ない遺跡のひとつであり、将来の調査に期待するところ大なるものがある。

最後に、今回の調査遂行にあたり、地元関係者の皆様ならび発掘に携わっていただいた方々に深く感謝申し上げます。

小段遺跡発掘調査概報

発行日　平成5年3月31日

発　行　塩尻市教育委員会

印　刷　クマガイ印刷